

災害復旧事業によせて

平成16年災 刈谷田川災害復旧助成事業について ～安心・安全なまちを目指して～



新潟県見附市
市長

久住時男

1. はじめに

本年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」において震災の犠牲となられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表すとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

また、平成16年水害の記憶も新しいなか、「平成23年7月新潟・福島豪雨」が7月27日～30日に襲来し、見附市内でも多くの被害が発生しました。しかしながら、当事業により刈谷田川では洪水被

害が無かったことは災害復旧助成事業によることが大きく、事業主体の新潟県、国、工事関係者や地元の皆様に心より感謝申し上げます。

見附市は、新潟県のほぼ中央に位置し、東京都心から約300km、新潟市中心部から約50kmのところにあり、北陸自動車道中之島見附ICや国道8号及び上越新幹線といった高速交通体系に容易にアクセスできる恵まれた環境にあります。

市の大きさは、周囲約70km、東西に11.5km、南北に14.7km、標高は海拔最高300m、最低10mとなっています。

市の東側の約半分が丘陵地帯、残り西側が平野部を構成し、守門岳に源を発する信濃川水系の刈谷田川が、東の丘陵地帯から西の平野部を横切った後、北上しています。

市の人口は42,436人（平成23年10月1日現在）で、肥沃な土地を生かした農業と繊維産業を基幹産業として発展してきました。

繊維の歴史は古く1800年頃から始まり、幕末には見附結城が全国的にも知られるようになり、以後、染色、織物、ニットなどの総合繊維産地として発展してきましたが、近年はプラスチック製品製造業、金属製品製造業を初めとする様々な企業が進出し、繊維産業に依存する産業構造から複合的な構造に遷移しています。

また、安定した経済基盤の構築と、多様な業種の共存によるバランスの取れた産業構造を目指して、見附テクノ・ガーデンシティ（中部産業団地）への企業誘致を積極的に進めており、若者が定着できる産業都市としての地歩を固めつつあります。



見附市位置図

2. 見附市を襲った「平成16年新潟福島豪雨」

日本海から新潟県を含む北陸地方にかけて停滞した梅雨前線に、暖かく湿った空気が流れ込み、前線が活発化し、激しい雨が新潟県中越地方を中心に降り、栃尾市が7月13日の日雨量は421mm（气象台：栃尾観測所）に達する記録的な豪雨となりました。

この豪雨により、刈谷田川では各地で堤防破堤等による洪水氾濫が発生し、見附市内では豪雨により人家の床上、床下浸水が2,036棟を数え、被災者が7,110名、消防、自衛隊、警察に救助された方が956人、住宅、公共施設、産業被害の推計が約184億円に達するなど、市民の安全や財産に

甚大な被害を及ぼしました。



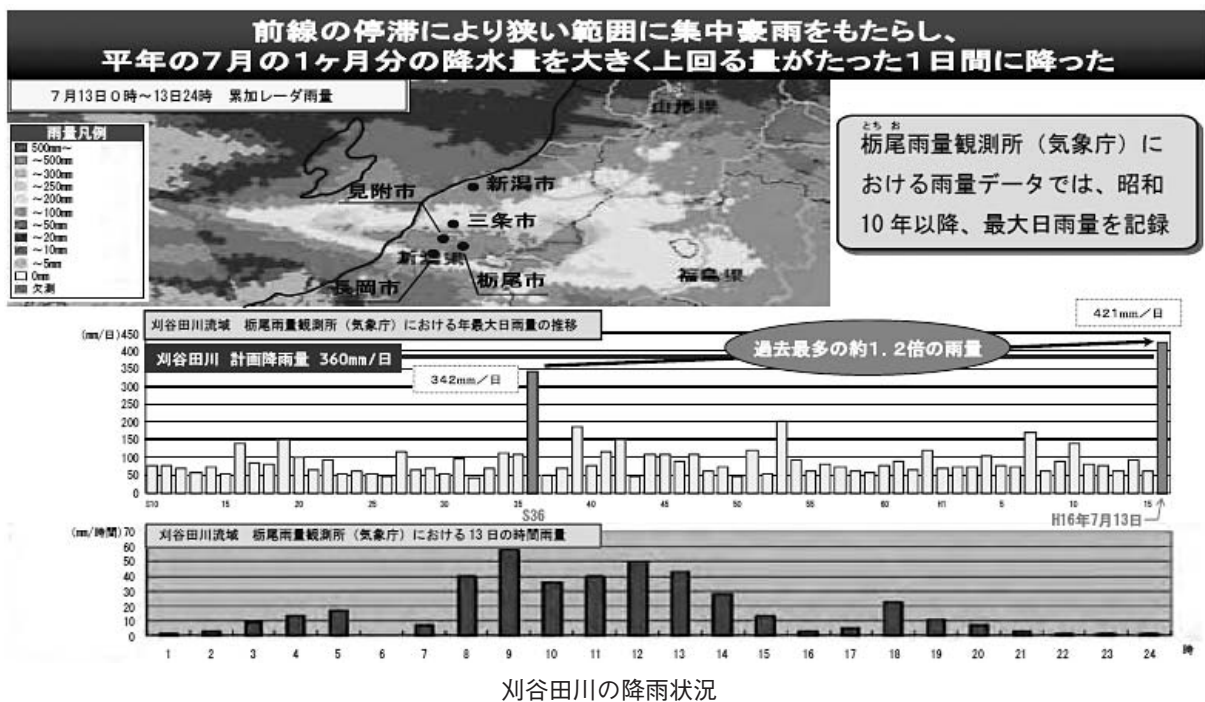
市街地の浸水状況



刈谷田川破堤状況



市街地の救出状況



3. 刈谷田川災害復旧助成事業の実施

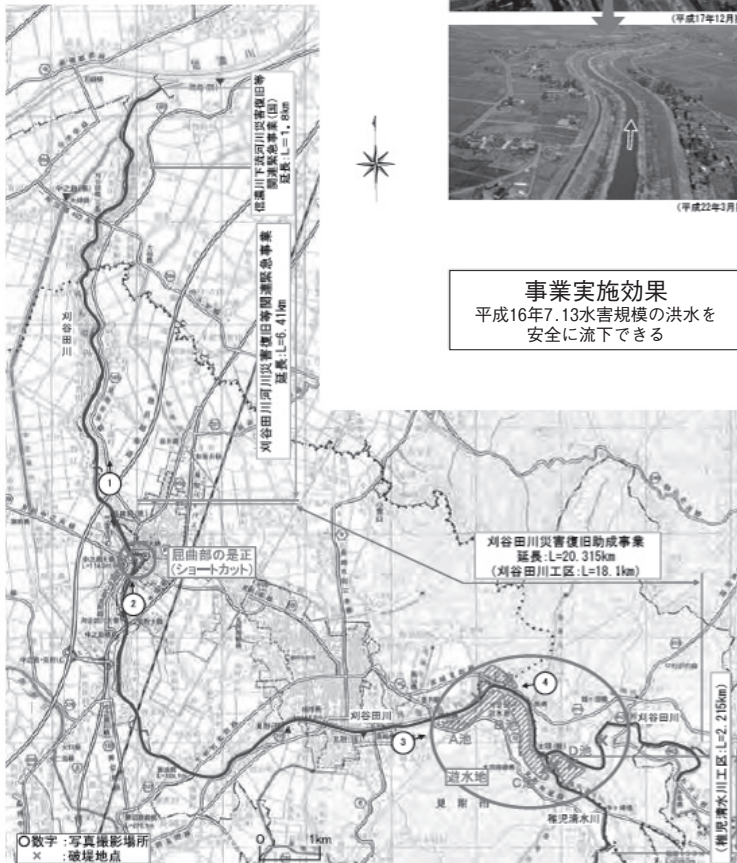
「平成16年新潟福島豪雨」のような洪水による被害を防止するためには、刈谷田川上流部の栃尾市(現長岡市)から本川である信濃川合流点まで、刈谷田川支川の稚児清水川を含めて一体的に整備することが必要であり、新潟県では「平成16年新潟福島豪雨」と同規模の洪水に対し、再び洪水被害が生じないように、下流部の信濃川管理者である国とも連携し整備を行うこととなりました。

事業方針

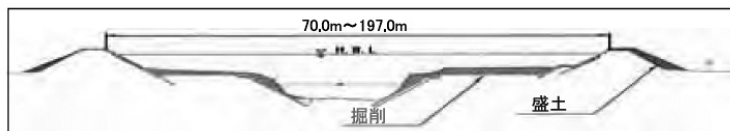
- ・高水敷掘削による河道内整備により計画高水流量を計画高水位以下で安全に流下させます。
- ・中之島町(現長岡市)破堤箇所(河道屈曲部)は流路を是正し、洪水を安全に流下させます。
- ・刈谷田川流域で最大の市街地である見附市上流域に遊水地を設置し、河道への負担を低減させ、下流地域の安全を守ります。

刈谷田川災害復旧助成事業

- ・位置図
- ・整備状況写真



整備前・整備後 写真



改修標準横断面図

計画概要

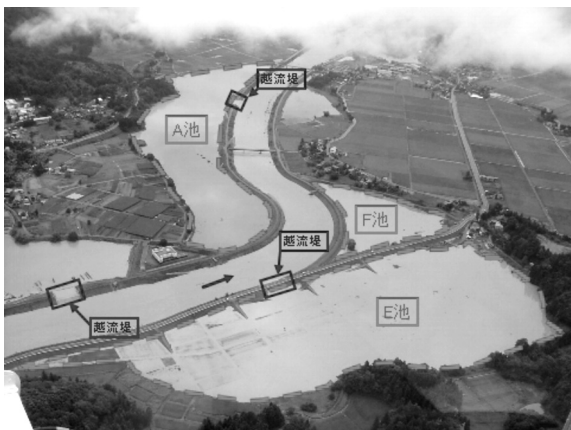
事業区間：栃尾市（現長岡市）鴉ヶ島～見附市下
関町

事業概要：改修延長 L = 約20km
 築堤 V = 約42万 m^3
 護岸 A = 約54万 m^2
 河道掘削 V = 約160万 m^3
 遊水地 N = 6箇所（面積 約91ha
 貯水容量 約235万 m^3 ）
 橋梁架替 N = 4橋
 用地取得 A = 約23.2ha

刈谷田川災害復旧助成事業にあわせて、助成事業の下流部から信濃川合流部については、「河川災害復旧等関連緊急事業」、国管理である信濃川については「信濃川（下流）河川災害復旧等関連緊急事業」により、一体的な整備を行い、刈谷田川に関する事業については平成23年10月26日に無事、竣工式がとり行われました。

また、冒頭にも述べましたが、平成16年の豪雨の再来である「平成23年7月新潟・福島豪雨」が7月27日～30日に発生し、見附市内だけでなく新潟県内でも多くの被害が発生しましたが、当事業により刈谷田川では洪水被害が無かったことは、当事業の効果が発揮されたものと思われます。

特に河川改修のほか、上流部に地役権方式を活用した、総面積約91ha、地権者355名の協力を得



H23. 7 新潟福島豪雨 遊水地洪水流入状況

て本年、遊水地が設置されました。

「平成23年7月新潟・福島豪雨」に対しても、この遊水地が機能し洪水被害を防ぎ、その有効性が実証されました。

4. 見附市における防災対策の取り組みについて

見附市では、「平成16年新潟福島豪雨」、「新潟県中越大震災」を教訓に、下記の通り防災対策に取り組んできており、「平成23年7月新潟・福島豪雨」でも迅速な対応ができました。

(1) 情報収集・伝達方法の強化

- ① 民間気象会社によるピンポイント予報
- ② 気象情報・ダム情報・河川水位情報の収集と分析
- ③ 緊急情報メール(全市民の1/4以上が登録)による避難情報等の配信
- ④ 嘱託員・福祉施設・学校・企業、等へ防災FAXを配備
- ⑤ サイレンによる避難情報の伝達

(2) 市民『共助』による防災対策

- ① 自主防災組織の育成、防災ファミリーサポート制度の確立
- ② 全市民を対象に、水害を想定した防災訓練を、毎年実施（全市民の約1/4にあたる1万人以上が参加）
- ③ 見附市豪雨災害対応ガイドブックを全世帯に配布

(3) 各種内水対策の実施

- ① 雨水貯留管による市街地浸水の軽減
- ② 市内1,200haの水田を『田んぼダム』として、約240万 m^3 （計画）を貯水
- ③ 消雪用井戸への雨水注入の実証実験

なお、刈谷田川ダムにおいて洪水期、水力発電用水量を振り替え、治水容量20%アップしました。



5. おわりに

被災直後より、全国各地から寄せられた温かいご支援、ご援助に対して深く感謝申し上げます。

また災害救助にあたって頂いた自衛隊、消防の皆様、災害復旧に協力いただいたボランティアの皆様、そして被災から助成事業完了までの早期復旧のため迅速な対応により事業が無事に完了したこと、国、県や地元関係者や実際に工事をされた皆様に改めて感謝申し上げます。

見附市では、災害による被害を最小限にするべく、今後も防災対策の強化に努めてまいります。

また見附市では、スマートウエルネスシティによるまちづくりをすすめており、国土交通省の【かわまちづくり支援制度】を活用し、刈谷田川堤防を利用したサイクリングロードの設置などにより、「市民の【健幸】づくり」に刈谷田川を活用していきたいと考えております。